

題 言

北海道における公衆衛生の実際面に寄与することを企図している本研究所の調査研究も引き続いて行われ、その発表機関である所報もここに第9集が刊行されるようになった。諸研究も漸く公衆衛生の各方面にわたっており、まず期待の線に沿うようになってきたようである。しかし勿論現状をもつて満足すべきではない。

元来衛生研究所の調査研究は課題の採択に心をくばるとともに、常に内省を深めて軌道からの逸脱のないように心掛けなければならないので、その点でなかなか難しい事業であるといえよう。幸に当衛研の年次における研究課題は道衛生部と協議を行つて、その合議の下に選択されるので、突発的問題のほかは目的の線からそれることはない。

又研究調査の遂行に当つては常に各保健所の大きな支援を得ている。かように衛生行政面と調査研究の機関が一体となつて協同的に行動していることは北海道の特色ではあるまいか。われわれとしてはますますこれらの厚意に酬いるところがなくてはならないと思つている。

昭和32年11月ボトリヌス中毒の世界的権威者カナダのバンクーバー所在ブリチツシユコロンビア大学教授 ドルマン 博士が夫人同伴で本研究所のボトリヌスに関する諸研究を視察のため来訪された。かねがね同教授と飯田科長の間には文献及び通信の交換があつたほか、離れてはいたが、種々厚意をうけていたので、この来訪は喜ばしかつた。われわれとしても出来得る限り歓待につとめ、教授夫妻は深い印象を刻んで旅行の目的であるバンコックにおけるWHO主催の講演会に向つて立たれた。これは当衛研にとつて記念すべき行事であつたので附記することにした。

昭和33年3月下浣

北海道立衛生研究所長 中 村 豊